



公益財団法人愛知県文化振興事業団

2026年5月26日(火)  
愛知県芸術劇場  
(公益財団法人愛知県文化振興事業団)  
企画制作部  
☎ 052-955-5506

<Press Release>

報道各位

速報

# 第23回AAF戯曲賞 受賞作品決定のお知らせ



約5時間半にわたる白熱した議論の末、大賞・特別賞が決定！

本日、5月26日(火)に開催しました「第23回AAF戯曲賞」の公開最終審査会において、大賞および特別賞が決定しました。

今回は、応募作品過去最多の256作品の中から一次審査を経て25作品、二次審査で5作品を選出。最終審査では、二次審査員も務めた荒井洋文(プロデューサー、舞台芸術制作者、犀の角代表)、倉田翠(演出家、ダンサー、akakilike主宰、まつもと市民芸術館芸術監督(舞踊部門))、平塚直隆(劇作家、演出家、俳優、オイスターズ)、廣川麻子(特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク(TA-net)理事長)、山口茜(劇作家、演出家、トリコ・A/サファリ・P主宰、メニコンシアターAoi芸術監督)ら5名が選考を行いました。

最終審査では、公開で熱い議論を繰り広げた末、ノミネートした5作品から大賞(1作品)に『いみいみ』(泉宗良)、特別賞(1作品)に『良いキャンペーン』(三橋亮太)が選出されました。大賞受賞作品の『いみいみ』は、2027年度以降に当劇場のプロデュース公演として、愛知県芸術劇場小ホールにて上演する予定です。

なお、第24回のAAF戯曲賞は26年9月頃から募集を開始し、第25回以降は隔年で募集を行う予定です。

## AAF戯曲賞とは…

劇作家の発掘・育成、愛知からの文化創造・発信を目的に、2000年に創設された受賞作の上演を前提とする戯曲賞。社会の価値観の多様化などを踏まえ検討を重ね、第23回から「言葉と個と場と」とテーマを一新。戯曲の言葉を通じて個と場と社会をつなぐ取り組みを進めます。演劇や戯曲が持つ力や可能性をさらに広げながら、地域や社会の課題にアプローチする事業も展開していく。

## お問合せ

愛知県芸術劇場(公益財団法人愛知県文化振興事業団)

企画制作第二グループ(武石・仲村)

〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2 Tel 052-955-5506 Fax 052-971-5541

E-mail: [pr@aaf.or.jp](mailto:pr@aaf.or.jp) WEB: <https://www-stage.aac.pref.aichi.jp/event/detail/20260526.html>



第 23 回 AAF 戯曲賞 公開最終審査会(審査中)の様子

## 大 賞(1 作品) | 『いみいみ』 <sup>いづみ そら</sup> 泉 宗良



### プロフィール

劇作家、演出家。うさぎの喘ぎ主宰。1996 年大阪生まれ。大阪教育大学在学中にうさぎの喘ぎを旗揚げ。2022 年よりウイングフィールドスタッフ。劇評企画や、安全な稽古場運営のための WS 企画等の立ち上げに参加。DIVE 大阪現代舞台芸術協会理事。西陽<ニシビ>プロジェクトメンバー。

### 作品概要(応募者原文)

本戯曲は台詞全文が「AはA」といった同語反復で構成されており、そこには解釈の可能性と、可能性への拒絶が同居している。例えば、本戯曲で頻出する「女は女」という同語反復は、「女は所詮女」という差別的な響きを持つこともあれば、「女性であることは私の一側面に過ぎない」といった、差別への抵抗を示す台詞として（「女は女、私は私」といった具合に続けてみると分かりやすい）捉えることもでき、その解釈は読者、観客、上演に委ねられる。と同時に、同語反復は恒真命題であり、論理学上、それは何も言っていないに等しい（AはAであり、それ以上の何の意味も持たない）、解釈を拒絶する表現でもある。本戯曲は、このような同語反復の特性を活かし、現代日本における女性の客体化とその抵抗を描くと同時に、本戯曲の上演が鑑賞可能であるというその事態をもって、我々に内面化されている先入観、偏見を暴き出そうという試みである。

特別賞(1作品) | 『<sup>い</sup>良いキャンペーン』 <sup>みつはしりょうた</sup>三橋亮太



©神代樹里菜

### プロフィール

演劇作家。1998年千葉県生まれ。演劇団体 譜面絵画 代表。上演における体験性を高めるために戯曲構造から取り組み続けている。入れ子構造を応用しながら、音声出演や映像出演などの肉体以外のメディアをミックスした演劇作品を多く発表する。2024年3月『ホームライナー新津々浦1号』の作・演出として、かながわパフォーミングアーツアワード 2024 MVP 賞を受賞。同年10月、『桃を朝にガブリ』で第9回せんだい短編戯曲賞 大賞を受賞。

### 作品概要(応募者原文)

パンデミック以降、今ここではない場所への憧憬から土地と旅の話の繰り返し扱ってきた。現在でも世界中では悲劇が止まらず、過ちが繰り返されている。日本では戦後80年を迎えた。戦争や疫病、災害といった巨大な死の狭間で今日を生きる感覚として、これから生まれるかもしれない悲劇やすでに生まれた悲劇の超未来を想像したいと考えた。同時に「ダークツーリズム」「安楽死」といった現代において賛否両論ある重要なトピックについても取り上げることで、そこから考えられるプラスとマイナスの両面を捉えながら、悲劇の実体験とその風化を防ぐこと、トピックを消費する人々、SNSなどを通じた二次消費など、顔の見えない人間による無責任な炎上など、現代社会における問題を自らの視点で描き、形にしたいと考えた。